校長研修だより１９６

ルールを守らせる生徒指導

2025・4・30　重枝 一郎

ルール違反をした生徒に対する毅然とした対応は当然大切である。そのため，「ルールを守らせる生徒指導」の実践は重要である。一言で言うと，**「勝負は一瞬，努力は無限」**ということである。生徒がルール違反した一瞬は逃してはならない。また，その対応には，生徒への予防・開発的なアプローチや日頃の語りなどで醸成される信頼関係が大切になる。

ルールには，**インナールール**と**アウタールール**があると考えてほしい。インナールールとは，心の中の内的なルールのことで「信頼関係」のことである。アウタールールとは，心の外の外的なルールのことで「集団の規律」のことになる。アウタールールだけを」押し付けようとすると，生徒は逸脱・反発しようとする。これは自律的学習者につながらない。だから，アウタールールのルールメイキングを参加的にさせることは多い。実は，参加的にすることで，インナールールを同時に育もうとしているのである。ルールを守らせる上で，インナールールを同時に育てることはとても重要である。生徒は，**インナールールがあると，アウタールールを押し付けられていることを理解しつつも，不快感のないものとして受容し，自然な形で受け入れていく。**

このインナールールは，教師が，生徒との日常の関りや人としての生き方・あり方を見られることで育まれる。インナールール構築の基本は，生徒のよさや持ち味を引き出す指導をしていると自然に構築されるが，インナールールを高めるポイントとして，「３つのニーズ」を示す。

①　同一視ニーズ
これは，一緒に掃除をしたり，会話しながら昼食を食べたり，共感性を充足させること。

②　理想化ニーズ
これは，「先生はすごい！」とあこがれをもたせること。

③　鏡ニーズ
これは，先生はいつも私を見ていてくれると感じさせること。

インナールールを高めるポイントとして，この「３つのニーズ」は一般的に言われることである。

もう一つ言っておきたいことがある。それは，**「微調整する力」**である。１年間のスパンで「微調整」のイメージをもっていてほしい。まずは，生徒に，「教示的」でアプローチすることになる。しかし，「教示的」だけでずっと通そうとすると集団は退行していく。アウタールールだけのアプローチということである。「自律的学習者」育成にもつながらない。だから，次に，「教示的」から「説明的」に移行していく。もちろん同時進行的にインナールールを高めながら，「説明的」を「参加的」にしていき，最後は「委任的」になるよう微調整を繰り返す。つまり，教師主導から生徒主導にする場面を増やしていくことになる。

このようなアプローチを多くの先生が実践することで，自律的学習者の学校風土はつくられる。

学級風土（その学級の性格）＝
学級文化（意図的・継続的の成果として生じる学級の生活様式）
＋　**学級の雰囲気**（その場その場での教室の状態）